

# トルコの幼児教育について

加藤 定夫

## はじめに

二〇〇三年度OMEPE世界理事会及び国際セミナーが十月六日から十日まで、トルコの南部、エーゲ海に臨むクシャダシュで開催された。クシャダシュの町から車で十五分の所に三千年前に三十万人が住んでいたというエフェソス（エフェソ）の町がある。古い歴史を感じる場所である。

国際セミナーのテーマは「文化の十字路 乳幼児の発達と教育の示唆」である。そこでマルマ大学のオクタイ博士による「トルコの幼児教育について」の講演があつた。ここではまず資料によりトルコの教育について紹介し、次に講演要旨を紹介する。

一、トルコの教育（トルコ大使館、その他の資料による）  
トルコには現在〇歳～六歳の子どもが約八百五十万人おり、その中で五、六歳の子どもが約三十パーセン

トをしめている。就学前教育は、日本と同様に六歳児未満は義務教育ではなく、教育省の下で指導され、監督されている。それだけにその教育組織は多様で、幼稚園 (kindergarten)、準備教育教室 (preparatory classrooms)、応用教室 (application classrooms)、託児所 (day nurseries)、保育所 (nursery schools)、子どもの家 (day-care homes)、保育室 (child care homes) などがある。それぞれの施設によって、保育が、半日であつたり、終日であつたりする。その他に国民保険センター・社会福祉省所管の保育センターや保育ホームなどがある。

一九九二年には幼稚園等の就園率は、五パーセントであつたが、現在トルコにおいて実際に何らかの幼児教育を受けている子ども達は、十六パーセントである。しかし幼児教育の重要性に政府及び教育関係者、これらには保護者の関心が高まり、その普及率は急増している。特に一九九五年の北京女性会議以後女性の識字率を高める運動が急激に高まり、一九九〇〇〇年までに女性の識字率を百パーセントへと成し遂げる決議がされた。これによつて働く女性も急増し、一九九八年には二十八パーセントの女性が本格的に社会参加し、保育への需要がますます高まつてしまつてゐる。

現在義務教育は六歳から十四歳までの八年間であり、教育費は無償である。わざにその内容は、憲法、教育基本法、初等教育法によつて保障されている。乳幼児は、一般的にはDay Nursery (〇歳～三歳)、Kindergarten (三歳～ヶ月～五歳)、Pre-School (六歳～七歳) に分けられて保育され、制度や施設も整備されつゝある。

## 二、講演内容

トルコでは民主主義の発展に伴つて、幼児教育の重要性が高まり、このことは社会全体に受け入れられておつくる。このために三つの原則があつた。第一に、子どもの個性を認め大事にすること。第二に、個人が

持つてゐる可能性をどう高めるかということ。第三に子どもにとつての基盤となる家族の持つ機能の健全性である。

トルコの幼児教育のこれまでの歴史を概観すると、共和制の時代と一九八三年の新憲法、および新政党法の成立した西欧的民主主義時代とに分けることができる。共和政時代、教育は公的な基準が存在しておらず、いわば教育の多様性の下に行われ、公的には、一九三〇年代に公立の学校が設立されているが、実際には一九〇八年イスタンブールに個人立て学校が設立されている。一九四四年には幼児教育のための予算化が初めて政府によつてなされ、一九五〇年には教員養成が本格的に始まつた。これによつて教育の専門家が増加し、自治体の家族への援助施策も伴い、小学校での教育が最優先課題になり、識字率が急速に高まつた。しかし農村部では幼稚園等に入学することは禁止されたところもあり、識字率の高まりは少なかつた。反面

イスタンブールなどの都会では、働くなければならぬ母親が急増し、新たな幼児のための施設が設立された。

近年の状況としては、幼児にとどまらず国民全ての教育に関する事項が国家全体の課題となつてゐる。特に一九八〇年代には、三歳未満児（toddler）や乳児（infant）に対する相談援助がNGO組織を中心に行われた。さらに西欧化が進んで、「幼児教育法」が五年間のスパンで具体的目標を掲げ、〇歳～六歳までの子ども達の施設が次々に開設された。各五年間で約十パーセントずつ幼児教育は普及していく。それらを推し進めたのは、一九九六年に始まつた「父親サポートプログラム」の実施である。さらに現在では、働く母親を援助する法律が社会保障省により成立しており、二歳～八歳の子どもを持つ母親への責任を示している。統計によると約二十パーセントの母親が、この法律に関心を示してゐるといふ。

幼児を守る施策として、家族を基本とした施策とその施策を基盤とした制度が存在したが、これらの施策は十分に機能を果たすことができなかつた。すなわち約八十万人の子どもたちが入園希望しているにもかかわらず入園できなかつたのである。そこでさらにこれらを補うための制度として家庭教育と施設教育とを区別して重点的に援助する新たなサポーツシステムがヨーロッパ諸国と連動してスタートした。このことは、母親教育の最初の一歩ともなり「母親と子ども協会」が設立することにもつながつた。五歳までの子どもたちには新たな「父親サポートプログラム」を作成し、さらには「両親プログラム」を作成し、一九九四年にはいくつものモデルが作成された。これらのモデルは社会基盤モデルとして多機能化していく、幼児を持つ働く母親の教育学的サポートの有効性が増していった。現在は主に以下の三つの目的に添つたプログラムが遂行されている。



▲ 小・中学校での歓迎、小学生の民族ダンス

- 1、働く母親のサポート
- 2、収入の低い家族を考慮し、少ないコストで質を高めること

### 3、貧しさゆえに働いている母親のための援助

前記の目標を達成するための試みとしてマルマ大学ではビデオを使って、その効果を上げている。そのプログラムはショート立てであつたり、セサミストリートの活用であつたりする。さらには両親教育と教員の訓練プログラムでは、心理学や小児医学を応用した。二〇〇二年製作の「Would you play with me」というテレビプログラムは、〇歳から子どもの母親を対象に構成されている。

予算の面では、中央の予算を地方に分散した。これによつて地方は自分達の責任を果たし易くなり、政府の責任としてはEUヨーロッパユニオンに各方面で追いつくことができると思ったのである。さらなる地方

の責任は、各施設の基盤を確実なものにすることであり、子ども達がすすんで幼稚園等に通えるように奨励していくことである。

### 現在の幼児教育の課題として、母親の教育がある。

すなわち母と子の良い関係がないと学校での不適応を作り出すからである。しかしこのための方策としては、幼稚園などのカリキュラムを変えることではなく、トルコ語の標準化が求められる。国民の約九十分の一がトルコ語を話すが、このトルコ語は時代の変化によつてフランス語、アラビア語、ペルシャ語などが交ざり、さらには多様な方言もあり、歴史の変革に翻弄されてきた言語といえる。そこで国家的標準化が必要になっているのである。

次に幼児教育・保育においては、子どもをトータルに捉えることが必要である。すなわちホリステイックなアプローチが必要である。このアプローチの中ではDay Nurseryでは、身体的ケア、栄養管理、道徳心の

発達に力を注ぎ、Kindergartenでは、教科書的に何かを教えることはなく、トルコ語の読み書きおよび環境設定、衛生管理、ドラマなどを中心に学校生活の移行までの期間として考え、Pre-schoolでは、小学校へ入

学してスムーズな学校生活ができるような人間関係などに中心が置かれている。この過程でオーディオ・ビジュアル教育を心理学的に取り入れる必要がある。これらは外見ではなく、個々の心の枠組みとして考える必要がある。

現在のトルコでのプロジェクトとして、母親が最初の教師であるという認識を前提に、子どもが個人的性格を形成するのに母親が中心的な影響力を持つという考え方により、母親に子育て・教育の理論化を促し、教育訓練をし、何らかの資格化を図る必要があると考えられている。なぜならば、近代国家には国際的基準が必要だからである。この基準には評価システムが伴わなければならない。特に子どもと母親の行動評価基準

は、質を高めていかなければならぬ。

#### 結論

〇歳から六歳は最も重大な時代である。パーソナリティー形成の時である。この時代が子どもの未来を決定していくことになる。子ども時代の家族の役割としては、保育所、幼稚園、就学前教育施設との連携がさらに重要になる。子どもの最大の可能性を伸ばすための父親、母親への家族のサポートが大切である。そのための資源の開発および、より専門的な指導が必要であり、私たちはそれらをさらに求めていかなければならぬ。

(宇都宮短期大学)